
玖珠珂学園薬化学部!!

雪の変人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

玖珠珂学園薬化学部!!

【Nコード】

N1353N

【作者名】

雪の変人

【あらすじ】

薬化学部：それは生徒教師の双方を『副作用薬』という薬で手助け以上のことをする組織：
その組織に所属する九能雪（男）
彼を中心にこの物語はまわっていく。

プロローグ（前書き）

どうしてもオリジナルが書きたくてやってしまいました^^；

更新自体はそこまで早いわけでもないのので暇つぶしの中の暇つぶし程度に読んでください。

プロローグ

玖珠珂学園くすかがくえん、ここには生徒を、時には教師をも助ける「薬」を作ってくれる「薬化学部」なる部活、時には組織とも言われるものが存在する。

この部ではいろいろな「薬」、校内では『副作用薬』と称されるものを作っていた。

副作用と聞くと「眠くなる」などを思い浮かべるだろう。しかし、この組織で作られるのは『副作用薬』と呼ばれる、つまりそれほど副作用が強いのだ。一つ、例として「次の日に高熱を出す。」この場合は本来の作用は『小さい』のだ。

本来の作用が『大きい』ほど副作用が『大きく』なる。これが本来の「薬」の効果、例は抗癌剤だ。しかし『副作用薬』はそうではない、逆なのだ。副作用が『大きい』ほど本来の作用が『大きく』なる。

言っていることは同じに聞こえてしまう。しかしそれは病人ならそれで納得だ。副作用が大きいのは仕方がないなどと言えてしまう。しかしこれは健康な人への「薬」だ。なんでそんな副作用があるんだ！とでも言うだろう。これが『副作用薬』と言われるもとの原因だ。

そんな薬を作っている組織、薬化学部の一員 九能くのう 雪ゆき
彼こそ『副作用薬』を作っている張本人。

その彼を中心に、この物語はまわっていく……………

Chapter Zero 〈始まり〉

「僕、学校に行きたい！」

この一言が物語の始まりだった。

「そうか…そう言い出す日が来ると思っていたが…」

通信だけで学識を蓄えた雪には学校生活というものを知らない。それを体験したいと言いつ出したのだ。

「それならあなた、私たちの母校ならいいんじゃないかしら？」

「ああ、そこなら今の学長があいつだな…うむ、わかった、許可しよう。」

そう言って母は電話を、父はいろいろと僕に教えてくれた。

「いいか雪、お前は14歳、本来なら中学校に行くべき歳だ。しかしお前は知識は人以上に持っている。よって高等学校に、俺たちの母校、私立『玖珠珂学園』に通ってもらおう。」

雪には中学校、高等学校などのことはさっぱりだった。ので母校どうこうのところしかわかっていない。

「うん、わかった。」

「それでな、お前のその『やさしすぎる性格』それを治すこと。それが最終課題だ。それが出来たら行かせよう。大丈夫だ、お前にはこの俺が教えた『薬化学』がある。それを使うんだ、薬で治せば解決だ。」

『薬化学』 これは薬学と化学の合成。そのままだ。しかしただの薬学だけでは出来ない分野を化学で補いより広い分野だ。

「わかったよお父さん、僕頑張るよ！」

そう言って雪は自分用のラボに籠った。

「雪：なんでそんなに優秀に出来て…」

雪はすごい頭のスペックを持っていた。14にして大卒レベルの知識、理系文系問わず。化学にしては専門の学者レベルを超えている。しかし弱点は精神だ。その精神はまだ幼い、あまりにも純粋なのだ。だからここまでの知識が入れたのかもしれない。

「精神教育が無いとここまで幼いままになるものなのだな…」

その幼い精神を成長させる。それが最後の課題だった。：がこの両親、学者をやっているがために時間が無い。その所為で精神教育が進まなかった。それならなぜ学校に行かせなかったのか。それは子供が可愛すぎたのである。学校でいじめられないか心配でしかたなかったのだ。今も心配ではある。が初めての雪のお願いだったのだ。幼い精神の雪が今まで何も求めなかったのがおかしいくらいなのに「学校に行きたい」と初めてねだった。それをなるべく聞き入れたい。それが親の心情だ。

「あなた、あそこ、全寮制になったんですって。」

「え…」

プロフィール（後書き）

主人公 九能^{くのう}雪^{ゆき}

性別 男 14歳

身長 146cm 体重 38kg 痩せ型

両親ともに薬学、化学のエキスパートで学者。小さいころから指導を受けた。

学校には行かず、通信制で、飛び級大卒。

家に自分用のラボがありそこで薬を作っている。
精神教育が少ないのでかなり幼い精神。

以後、次回あとがきにて！（現時点で書くとなタバレになるから）

感想等書いてもらえるとうれしいかもです^^

プロローグ2（前書き）

設定がゆるいです^^；

いろいろな適当に見えますが適当だとか感想にするのは勘弁してください^^；

下手なのは仕様ですので（汗）

プロローグ2

僕は高校への編入に成功していた。

僕が編入したのは一月、ちょうど三学期が始まる頃だった。

性格、精神は薬、僕の家族特有の薬化学、これを用いて出来た性格変換薬とでも名づけようか、そのような薬で治した。が、薬には副作用がある。それを忘れてはいけない。僕の作った薬、『精神にかわる。解する薬を使わない限り一生。』なので副作用はかなり強い…と思っていた。しかし副作用は決めれないのでわからない。僕はその副作用を知らないまま編入まで行ってしまった。

編入したら寮暮らしだ。僕はなぜか特別な建物に案内された。『特別』と言うのは寮とは違う建物だったからだ。

「君はここ。学長から伝言で『ここにある器具はいくらでも使つかまわない。欲しい材料があったら私に言ってくれ。いい薬を作ってくれることを期待してる』って。」

寮長にそういわれたのでここがラボになりここで寝泊りするらしい。

その日はそのまま荷物が持ち込まれてそこで寝ることに。そして次の日から学校に行く。

学校に行く。内心ではドキドキしている。しかし薬の所為で感じるものが少ない。僕はクールな無関心になっているようだ。

僕は学長室へ行く。一応の挨拶。親とも知り合いみたいなので何もないと思う。

「失礼します。」

僕は部屋へと足を踏み入れた。そこには若い男性が腰掛けている…若いと言っても僕の両親と同じ位だった。

「君が九能博士…いや、九能先輩の息子さんですか…？」

「そうですが…なぜ最後が疑問系なんですか？」

「いや…ふむ、14歳だから…『可愛い』など…」

無意識に『可愛い』という言葉に反応した。僕はここで初めて副作用がわかってしまう。

「え？可愛いですか？ありがとうございますう♪」

性格が変わってしまう。これこそが僕の副作用。でも僕の中に『副作用』の意識は全く無い。

「ん？なんか性格がかわった…？まあいいです。あのラボは気に入ってくれましたか？君が来るということで急遽作ってもらったのです。と言ってもあったものをリフォームしただけなのですが。」

「ん…もったかわいいほうがよかったかなあ…？でも広いしいいよ♪でも一人って言うのは寂しいかも…」

「ふむ、そうか…なら部屋はあるだろうから君の気に入った人で同意があれば一緒に住むことを許可しよう。」

「いいんですか？ありがとうございます！♪」

「うゝむ、それにしても可愛いなあ…入る時は『クール』な感じが…」

そのときにまた変わる感覚。

「？どこかしましたか、学長？」

「？？？よくわからないなあ、九能先輩の息子さん…」

僕は編入したクラスへと向かう。担任とも合流済み。

「さて、九能君、ここ、1－Aが君のクラスだ。」

そう言って担任はクラスへと入っていく。

「よしみんな座れ。今日は始業式だ。といってももう終わったか。今日はこれで解散だがその前にだ。」

僕は手招きされたのでクラスへ入る。

「今日からこのクラスに入る九能雪君だ。」

「九能雪です。よろしく。」

ざわざわと声が聞こえてくる。

「質問があれば勝手にしろ。」

僕の意見はなしに勝手に質問コーナーになってしまった。

「小さいけど本当に16ですか？」

そこを聞いてきた。予想はしていたのでそのまま答える。

「僕は飛び級しています。今は14歳。一応大学卒まで持っています。が学校に行ったことが無かったのでいききたいと思いここにきました。」

その一言でまわりはすごくうるさくなった。

すごいだのなんでこんなところになどいろいろな感想が飛んできた。

「はい、静かに。他に質問ないなら終わりにするぞ。はい終了。」

えいとかそこらじゅうから聞こえてくる。そのまま解散になった。僕は最後に席だけ教えられた。

「ねえねえ。」

後ろから話しかけられた。このクラスの子ではあるようだ。

「……やっぱり…雪ちゃん…だよね？」

「……?？」

ちゃんと呼ぶ…僕が知る限りちゃんと呼ぶのは…

「晴…姉さん？」

「覚えててくれたんだあ♪」

浦見^{うらみ} 晴^{はる}、彼女は僕の家^はの隣に住んでいる。幼なじみだ。がここぱったり姿を見せないと思ったら：

「ここにいたんだ。」

「?? なんか変わったね？」

「ああ、ここに来るための条件だったからね。」

僕は葉のことについて話す。

「なるほど：性格を変える：よかったあ、姿形まで変わったらいやだったよ。もとの『可愛い』雪ちゃん^{ゆきちゃん}でよかったあ。」

「あうゝ可愛いなんて：／／／」

僕は照れてしまった。こんなこと無かったのに。

「うゝ♪ホントに可愛いなあ♪」

と、再開をよろこんでばかりじゃられない。もう一つの「薬化学部に入る」と言うのをこなさないで。

「ねえ晴お姉ちゃん、薬化学部に入りたいんだけど…」

「え！薬化学部！？私と同じだ♪じゃ、いいいこ！」

僕は引っ張られていった。

部室ではないが職員室で顧問の先生に入部の届けをだし、今日はそれまでだった。

「さて、今日から同じ部だね♪」

「うん、よろしくね、晴お姉ちゃん。」

それぞれの寮（僕はラボ）に戻っていく。僕は一人になったときに変わる感覚に陥る。

「…なんだ…今までほかの事を話していたような…ふむ。」

なにが起るかわからないので一応いろいろと施していたことをとく。

「まずは…声か。」

僕はボイスレコーダを取り出して再生する。とすぐに気がつく。

「口調…いや、性格が変わっているのか…」

会話の中にそれらしい部分を発見した。これが僕の副作用だろうと思ひ知る。

「…何されるかわからないな……」

あとはもう一つ思った。

「∴僕は『可愛い』のか？」

このことを知ってもう三ヶ月、二年生になる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1353n/>

玖珠珂学園薬化学部!!

2010年11月21日11時18分発行